

収縮を有意に抑制し、増殖膜内のアクチンストレスファイバの形成に関しても抑制的に働いていた。

【結論】 実験的増殖硝子体網膜症モデルにおいてデコリンは、増殖膜の収縮抑制に効果をもたらしており、今後の新規治療につながる可能性がある。

平成26年度東京医科大学研究助成金による研究

P2-38.

もの忘れ外来での認知症行方不明者アンケート結果

(高齢診療科)

○沖田 美佐、櫻井 博文、高田 裕輔
佐藤 友彦、清水聡一郎、金高 秀和
馬原 孝彦、羽生 春夫

【目的】 認知症患者の行方不明者数が増加している。警察庁発表によると、平成25年の認知症患者の行方不明者数は年間1万人を超え、本邦の行方不明者数の原因の1割以上を占める。保護されるも住所・氏名が分からず身元不明となるケース、鉄道事故で家族に損害賠償を求められるケースなどが、社会的な問題となっている。各自治体での対策が急務となり、地域包括ケアの枠組みにて対応することが有効と考えられる。背景因子の分析のため、当院高齢診療科で、通院中の認知症患者にどの程度の行方不明や迷子の経験があるか、アンケート調査を行った。

【方法】 2014年7月から9月の2か月間、当院高齢診療科のもの忘れ外来へ通院した患者の介護者に、行方不明や迷子になったことがあるかどうか、アンケート調査を行った。調査結果より、患者背景(年齢、性別、罹病期間、MMSE、教育年数、臨床診断、BPSD有無)、発見されるまでの時間、発見状況、保護されたときの身体的問題などについて報告する。

【結果】 アンケート総数579名/有効回答521名のうち、行方不明や迷子になったことがあると回答したのは105名(20%)であった。平均年齢は 80.3 ± 7.6 歳、男女比は男性44名女性61名、罹病期間は2年未満が7名、2~4年が32名、5~7年が34名、8年以上が18名、MMSE平均値は $16.8 \pm 6.3/30$ 点、教育年数は 11.7 ± 3.5 年、臨床診断はアルツハイマー型認知症ADが93名、AD以外が12名であった。

【結論】 罹病期間2~7年の症例が多く、MMSE平均17点程度であり、行方不明・迷子には中等度認知症のケースでリスクが高いと考えられた。

P2-39.

二次性甲状腺機能低下症を原疾患として疑う認知症の一例

(腎臓内科学、(医)幸有会記念病院 老年精神科)

○江崎 真我

(腎臓内科学)

長岡 由女、岡田 知也、菅野 義彦

87歳女性。

【現病歴】 10年前に他院で甲状腺機能亢進症と診断され、チアマゾール20mg/日が開始となった。5年前のコントロールは良好であったが、この頃から内服方法を間違えて30mg/日を内服していたという。3年前に記憶力障害が出現し徐々に増悪した。昨年3月に動作が緩慢になり、尿失禁が出現した。同月の採血ではTSH 93.37 μ IU/ml、FT3 0.56 pg/ml、FT4 検出感度以下と甲状腺機能低下症を来していた。6月に別居の家族と共に近医を受診し、チアマゾールを5mg/日に減量のうえ7月16日に外来を紹介初診となった。

【経過】 初診時は全身倦怠感を自覚し、意識清明、脈拍数60/分、四肢の軽度筋固縮・深部腱反射と表在覚の低下を認めた。思考の速度は緩慢で、見当識障害と即時記憶力障害を認め、HDS-Rは3点であった。血液検査ではTSH 15.52 μ IU/ml、FT3 2.26 pg/ml、FT4 0.62 ng/dl、T-chol 247 mg/dl、抗TSHレセプター抗体と甲状腺刺激抗体は高値であった。頭部MRIでは両側前頭・側頭葉を中心とした高度の脳萎縮を認めたが、これに比して海馬の萎縮は軽度であり、脳室系の拡大を認めなかった。99mTc-ECD脳血流シンチグラフィーでは両側前頭葉・側頭葉・頭頂葉の集積低下を認めた。頸部超音波検査では甲状腺のサイズは小さく、多発する低エコー腫瘍を認めた。初診日よりチアマゾールを完全に中止したところ、7月29日に甲状腺機能は正常化した。同時期より全身倦怠感が消失し、食思の改善と思考速度の正常化を認め、8月27日のHDS-Rは10点になった。10月に当院終診となった。本年になり家族から得た情報によれば、認知症症状は残存し、当院終

診時と大きな違いは無いとの事であった。

【考察】 本症例の認知症の原因が、二次性甲状腺機能低下症のみであるのか、他の認知症性疾患に二次性甲状腺機能低下症を合併したかの判断には慎重を要するが、成人における認知症を伴う甲状腺機能低下症についての報告は稀であるので報告する。

P2-40.

Restless legs syndrome symptom during the daytime in Japanese population

(社会人大学院博士課程3年精神医学、大塚製薬株式会社)

○高橋 昌義

(大塚製薬株式会社)

池田 純司、富田 恭如

(獨協医科大学神経内科)

平田 幸一

(順天堂大学医学部附属順天堂医院脳神経内科)

服部 信孝

(睡眠学講座)

井上 雄一

【Introduction】 Restless leg syndrome (RLS) is a sensorimotor disorder that occurred when in a rest and become worse at nighttime. It is known that RLS symptoms occur during the day that ranges from 13.8% to 69% of patients in western countries. However, the prevalence of the daytime RLS in Japanese population has not been reported. We aimed to investigate the prevalence and clinical characteristics of daytime RLS in Japanese patients with idiopathic RLS.

【Methods】 We retrospectively investigated the data from clinical phase III study assessing the rotigotine treatment in Japanese patients. We assessed the duration and frequency of RLS symptoms during the day using the patient-recorded RLS-sleep logs. We investigated the relationship between the duration of daytime RLS symptoms and that of nighttime RLS symptoms. We also assessed the severity of RLS using IRLS and other severity using PSQI, JESS and CES-D.

【Results】 Daytime RLS symptoms were found in 31.6% in Japanese patients with RLS. The mean duration of daytime RLS was approximately 3 hours per

day. We found a significant positive correlation between the duration of daytime and nighttime RLS. The IRLS total score was only significantly higher in patients with daytime RLS than in patients without daytime RLS.

【Conclusion】 The rate of daytime RLS symptoms was relatively frequent. The daytime RLS symptoms found to be associated with an increment of duration of nighttime RLS symptoms and the RLS severity. These suggest that the treatment for RLS should be focused on the symptoms during daytime as well as during nighttime.

P2-41.

受動的に表情を変化させると感情/気分が変化する

(病態生理学)

○佐々木光美、林 由起子

(JR 東京総合病院：脳神経内科)

櫻井 透

(NTT 東日本関東病院：病理診断科)

橋本 浩次

【目的】 喜怒哀楽の感情は表情として表れる。一方、感情を起こさずに、顔の皮膚を受動的に変形するだけで、感情あるいは気分が変わるだろうか？ 本研究はまぶたを受動的に開き、感情/気分が変わるかどうかを感情評価テストを用いて調べた。

【方法】 健常な被験者(18-38歳)で実験を行った。受動的な表情変化の手法：目を普通に開けた状態から、被験者の指で、強すぎず弱すぎない適度の強さで両方のまぶたを上下に開いてもらった。安静状態で行い、何も考えないように指示した。受動的な表情変化を5分間行い、その前後に感情評価テストを行った。最後に感情/気分の変化を自由に記述してもらった。感情評価テスト：気分プロフィール検査(POMS日本語版)と状態不安検査(STAI-Y1日本語版)を行った。POMSは活気、緊張-不安、抑鬱-落ち込み、怒り-敵意、疲労、混乱の六つの因子を測定する。STAI-Y1は不安の程度を測定する。

【結果】 上下のまぶたを受動的に開けると、活気(ポジティブなスコア)が有意に増大する一方、ネガティブな感情/気分の全ての項目(POMS：活気以外の